

## 世代間比較調査「少年の世界」<sup>†</sup>

— 友人関係意識の現状と学校教育の課題 —

長田 勇\*・遠藤 忠\*\*

元愛知大学文学部\*

宇都宮大学教育学部\*\*

「いじめ」自殺事件が絶えない。なぜ？ 一方で、教育再生会議は、「いじめ」問題を視野に入れて、「規律」を重視した学校教育の「再生」を提言している。なぜそうなる？

少年の世界は、世代間でかなりのちがいがあ。とくに友人関係の意識の差が目立つ。それが「いじめ」あるいは「いじめ」自殺の多発要因にもなっている、と考えられる。

本論は、「少年の世界」の世代間比較調査の結果に基づき、「いじめ」問題を含めた学校教育の今後の課題を論ずることを目的とする。

キーワード：世代間比較、少年世界、友人関係、いじめ、自立心

### 1. 「少年の世界—世代間比較調査—」概要

今の子どもは以前に比べてどこか変わったであろうか？ 2003年に実施した『少年の世界』……その世代間比較調査……（長田）を基にして、現在の子どもの状況を見てみる。

調査の概要は次のとおりである。ただし、紙数の関係で本論では簡略にとどめる。詳細は、「学級担任『持ち上がり』慣行の成立・崩壊と学級経営観の変遷に関する実証的研究」（平成18年3月、科研費報告書、研究代表遠藤忠）で確認されたい。

【調査目的】：「少年の世界」（特に、友人関係）が過去の少年世代と比べてどう変質しているかを明らかにし、「登校拒否」、「いじめ」、「少

年犯罪」等の少年問題および学級経営上の諸問題を考える際の基礎となる資料を作成することを目的とする。

【調査仮説】：現在の少年たちほどに友人関係に神経を使う世代は過去になかったのではないか？

【調査内容】：

① 調査地域＝岩手、栃木、東京、新潟、愛知、大阪、岡山、愛媛、熊本、沖縄の10都府県、および静岡

② 調査対象＝10都府県内の国公立私立幼稚園、小学校、中学校、高校より、層化割り当て無作為抽出をおこない、調査協力を受諾いただいた学校、および静岡の依頼校（高校1校）

③ 調査対象者数：総計10,568人

内訳＝小学五年生（男女計）1,201人、中学二年生（同）983人、高校二年生（同）1,163人、同居の父2,683人、母2,919人、祖父673人、祖母946人（幼稚園父母祖父母含む）

<sup>†</sup> Isamu Osada\*, Tadashi Endo\*\* : Intergenerational Survey on a 'Children's World' ; The Friendship-consciousness of the Current Children and Some Issues of School Education.

\* Former Professor of Aichi University

\*\* Faculty of Education, Utsunomiya University

④ 調査方法：託送調査・質問紙法（各世代同一内容調査。ただし、父母祖父母あての質問項目は過去形表現。各自の少年期の記憶を回答）

⑤ 方法の妥当性：現父母、祖父母世代の人々が少年であったころに同一尺度による調査がおこなわれていたとしても、古いデータは現時点ではリアリティをもたない。むしろ、経験を重ねて成熟した父母・祖父母が現時点の自分の頭で自らの過去を点検しなおし、同じ尺度で現少年世代も自らの行動を点検する、という同一尺度による双方の記憶の大集合をリアルタイムで（同一平面で）つき合わせてみるほうが納得がいく。

歴史学における「オーラル・ヒストリー」という方法（トンプソン『記憶から歴史へ』青木書店 2002 など）と調査方法が近似する。

⑥ 有効票数：総計8,736票、有効回収率82.7%（内訳・小学生男女計894票、74.4%、中学生691票、70.3%、高校生924票、79.4%、父2,397票、89.3%、母2,705票、92.7%、祖父457票、67.9%、祖母661票、69.9%）

⑦ 調査期間：03年2月から7月

## 2. 友人関係はどのように変わったか？

以下の統計は、断りのない場合、すべて「危険率1%」でカイ二乗検定済みである。

### （1）仲のいい友だちは多いか？

「仲のいい友だちは何人いますか？ 一つだけ選ぶ。 1.一人もいない 2.一人いる 3.二人いる 4.三～五人いる 5.六～九人いる 6.十人以上いる 7.その他」（父母祖父母へは「中学生の頃、……何人いましたか」）に各世代はどう答えたか。

この問いは、単なる「友だち」についてではなく、また、最近はほとんど死語に近くなった

「親友」という言葉を使っているのでもなく、一番わかりやすい「仲のいい友だち」について尋ねているのである。結果は表1のとおりで、「十人以上」という回答が年齢が若くなるにつれてぐんぐん増え、小中学生では半数近くになっている。この点は先行研究でも多く指摘されているところだ（総務庁『日本の青少年の生活と意識』1996など）。

（表1）＜仲のいい友人数・年代別＞（「無答」は除外。「その他」は表示略。以下同じ）

年代別	1 いない	2 一人	3 二人	4 三～五人
70以上	1.8%	7.3%	14.9%	54.5%
60代	1.4%	2.9%	14.8%	60.1%
50代	1.4%	4.5%	12.7%	60.2%
40代	1.3%	3.2%	10.5%	62.1%
30代	1.3%	2.0%	8.4%	58.2%
20代*	0.0%	3.2%	14.9%	46.8%
高校生	1.3%	2.2%	2.9%	33.6%
中学生	0.7%	0.7%	2.5%	25.8%
小学生	0.7%	2.0%	3.8%	24.8%

年代別	5 六～九	6 十人以上	総計
70以上	9.7%	8.9%	495
60代	10.9%	8.6%	514
50代	10.1%	9.9%	575
40代	12.6%	9.9%	2609
30代	16.1%	13.5%	1887
20代*	12.8%	22.3%	94
高校生	25.8%	32.0%	917
中学生	23.5%	45.1%	685
小学生	20.4%	46.3%	888

\*：「20代」は検定不能なので参考とする。以下、「20代」の場合は同じである。

（図1-1）＜友人数の多寡・30代以上＞

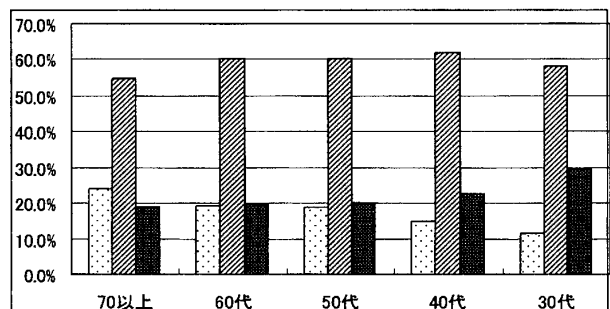
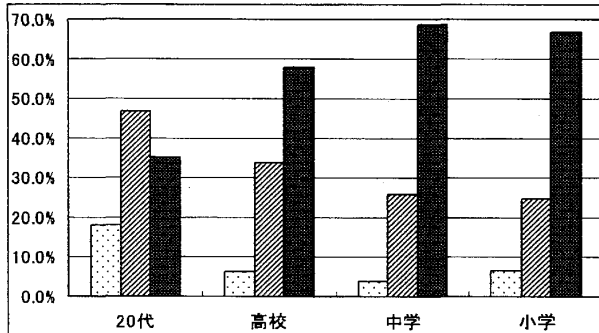


図1-1は、上表を「二人以下」、「三～五人」、「六人以上」に整理してグラフ化したもの

ち、30代以上についてである。「三～五人」が圧倒的に多いのがわかる。

ところが、次図1-2に見るとおり、「六人以上」が高校生以下では「三～五人」を逆転してしまう。しかも、「二人以下」がぐんと減る。

(図1-2) <友人数の多寡・20代以下>



では、休日に友だちと一緒にいることは、上に比例して多くなっているのか？ それを見たのが次である。

(2) 友だちと一緒にいることが多いか？

「休日は友だちと一緒にいることが多いですか？

一つだけ選ぶ。 1.ほとんど一緒 2.一緒のほうが多い 3.半々くらい 4.一緒のほうが少ない 5.一緒にはいない 6.その他」(大人へは「子ども頃」とした)。表3がこの結果である。高校生は通学区との関係があるので、ここでは表示を省いた。

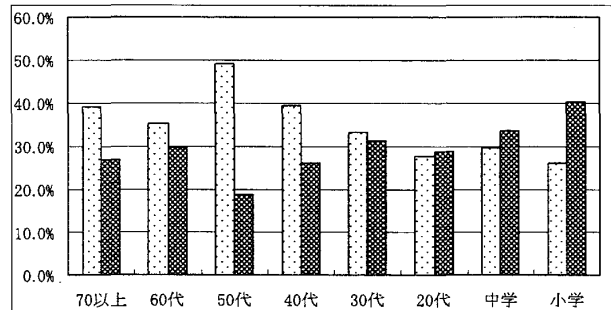
(表2) <休日は友人と一緒に・年代別>

年代別	1	2	3	4	5	総計
70以上	11.8%	27.3%	28.7%	15.1%	11.6%	509
60代	10.5%	24.7%	28.6%	20.0%	9.5%	514
50代	13.1%	36.0%	30.5%	14.3%	4.5%	573
40代	11.7%	27.6%	33.5%	19.1%	7.0%	2618
30代	11.2%	22.0%	34.7%	23.2%	8.2%	1887
20代	16.0%	11.7%	42.6%	21.3%	7.4%	94
中学	13.8%	15.9%	35.9%	24.8%	8.8%	690
小学	12.3%	13.8%	33.0%	32.3%	7.9%	885

図2は、「1ほとんど一緒+2一緒のほうが多い」=「多いほう」、「4一緒のほうが少ない+

5一緒にはいない」=「少ないほう」を年代別に見たものである。

(図2) <休日は友だちと一緒に・年代別>



友だちが多いのなら休日に友だちと一緒にいる機会も多くなる、と考えられるが、実際にはそういう傾向にならない。むしろ、「多いほう」は世代が若くなるにつれて減少する。

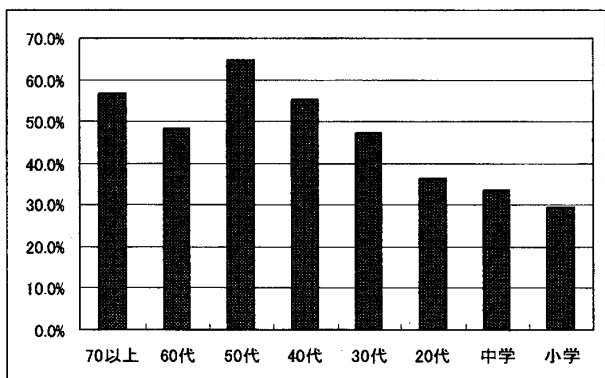
「仲のいい友だち」の数と「休日一緒」との相関はどうか？ それを下表に示す(「半々」も加える)。

(表3) <友人数と休日一緒の相関・年代別>

年代別	仲のいい友	休日一緒か		
		多いほう	半々	少ないほう
70以上	友2人まで	30.8%	38.5%	30.8%
	3～5人	42.5%	28.3%	29.1%
	6人以上	56.6%	24.1%	19.3%
60代	友2人まで	28.4%	29.5%	42.0%
	3～5人	38.0%	30.8%	31.2%
	6人以上	48.4%	31.9%	19.8%
50代	友2人まで	34.0%	34.0%	32.1%
	3～5人	50.0%	32.6%	17.4%
	6人以上	64.6%	23.9%	11.5%
40代	友2人まで	26.3%	32.6%	41.1%
	3～5人	37.5%	36.6%	25.9%
	6人以上	55.2%	27.3%	17.5%
30代	友2人まで	20.6%	28.9%	50.5%
	3～5人	29.2%	37.4%	33.4%
	6人以上	47.4%	32.6%	20.0%
20代	友2人まで	18.8%	50.0%	31.3%
	3～5人	25.0%	34.1%	40.9%
	6人以上	36.4%	51.5%	12.1%
中学	友2人まで	15.4%	38.5%	46.2%
	3～5人	21.6%	38.1%	40.3%
	6人以上	33.7%	35.4%	30.9%
小学	友2人まで	17.2%	29.3%	53.4%
	3～5人	21.7%	31.8%	46.5%
	6人以上	29.4%	33.6%	37.0%

次の図3は、「仲のいい友だち」が6人以上いる人で「休日友人と一緒に多いほう」である場合をグラフ化したものである。右肩下がりが明瞭に見える。

(図3) <友人6人以上と休日一緒に多いほう>



仲のいい友だちがたくさんいると自覚している人の多い現少年世代なのだが、休日に一緒にいる頻度は旧少年世代よりも少ない。

しばしば、「今の子どもは、友人関係は広いが浅い」あるいは「こういうときは誰々と、別の時は誰々と、というように選択的になってきている」という指摘があるが、この現象はそういう「つきあい形態」の問題であろうか？

### (3) 気持ちの落ち着く人は誰か？

今の子どもは、誰といるときが気持ちが落ち着くのだろうか？

「一緒にいると気持ちの落ち着く(ほっとする)人は誰ですか？ いくつ選んでもいい。

1. 父 2. 母 3. 祖父 4. 祖母 5. 兄弟姉妹の誰か
6. 友だちの誰か 7. 好きな男の子 8. 学校のある先生
9. 学校の保健室の先生 10. 塾のある先生
11. 親戚のある人 12. 近所のある人 13. その他
14. 落ち着ける人はいない(大人へは「子どもの頃」)

この種の問題には、「母」と答える人が多いが、ここでは「友だちの誰か」と答えた人を年代別に見るだけにしておく。

次表4に見るとおり、「友だち」を選択した

人が現少年世代で目立つが、そのことよりも、50代で4割強、60代以上では3割程度以下になることは特筆すべきであろう。

(表4) <一緒にいると気持ちが落ちつく>

年代別	友だち	総計
70以上	23.9%	507
60代	31.2%	507
50代	42.1%	568
40代	50.0%	2592
30代	45.5%	1873
20代	51.1%	94
高校	76.7%	918
中学	68.3%	682
小学	62.9%	882

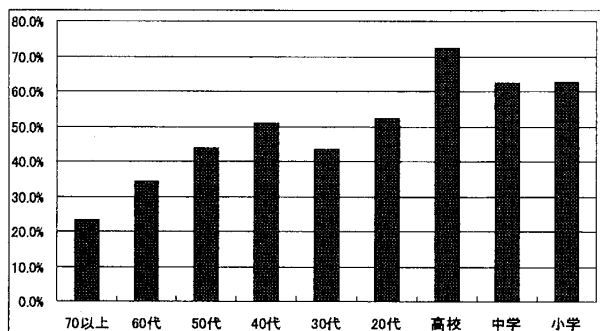
仲のいい友だちの数との相関はどうか？

(表5) <仲のいい友人数と「友だちの誰かと一緒に落ち着く」との相関> (「A、B、C」は「仲のいい友だち：A二人以下、B三～五人、C六人以上」)

年代別	友		友	友		友	友	
	A	落ち着く		A	落ち着く		A	落ち着く
70以上	A	23.5%	40代	A	35.1%	高校	A	61.0%
	B	23.1%		B	50.7%		B	72.4%
	C	30.7%		C	58.5%		C	81.9%
60代	A	16.7%	30代	A	32.3%	中学	A	63.0%
	B	34.4%		B	43.4%		B	62.4%
	C	38.1%		C	55.1%		C	71.5%
50代	A	27.1%	20代	A	17.6%	小学	A	38.6%
	B	44.0%		B	52.3%		B	62.7%
	C	52.2%		C	66.7%		C	65.6%

父母・祖父母世代では「B・三～五人」が一番多かったので(表1)、それだけをグラフで比較してみる。

(図4) <友3～5人と「落ち着く」との相関>



つまり、50代から上の人たちの半数以上は、「友だち」を選んではいない、ということだ。

#### (4) 学校での友人関係は？

友だちを作る場として学校は大きな比重を占めるとともに、友だちと一緒にいられるからこそ学校に通うことが楽しい、ということもありうる。実際のところ、子どもは学校では何を楽しく感じているのだろうか？

「学校にいるとき、次のどれを楽しいと思いますか？ いくつ選んでもいい。 1.好きな科目の授業 2.友だちと話したり遊んだりすること 3.クラブ・部活動 4.先生と話すること 5.昼食 6.ホームルーム・学級会 7.運動会などのスポーツ行事 8.学芸会・文化祭などの行事 9.楽しいことは何もない 10.その他」(大人へは「小中学生時代」)

このうち「1好きな授業」「2友だち……」「3クラブ……」「7運動会など」「9何もない」を次表に示す。

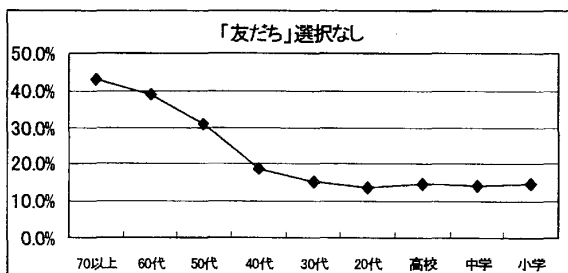
(表6) <学校で楽しいこと>

年代別	授業	友だち	クラブ	運動会	何もない	総計
70以上	42.5%	56.9%	7.9%	38.4%	3.9%	508
60代	43.6%	61.1%	25.1%	34.2%	2.5%	514
50代	44.4%	69.2%	37.4%	34.8%	1.2%	577
40代	43.8%	81.3%	49.1%	35.4%	1.4%	2620
30代	41.7%	85.0%	51.5%	39.2%	1.3%	1888
20代	41.5%	86.2%	44.7%	33.0%	0.0%	94
高校	25.0%	85.6%	27.1%	40.0%	3.6%	923
中学	44.7%	85.7%	49.2%	45.3%	2.2%	691
小学	54.1%	85.6%	51.0%	37.3%	1.1%	893

どの年代も「友だちづきあい」が一番多いが、50代以上の3割～4割強は、それが学校での楽しいこととは特に思っていなかったようだ。

図5は、その年代別の比較を示したものである。

(図5) <「友だちづきあい楽しい」の選択なし>



学校で楽しいこととして「友だちづきあい」を選ばないということは、友だちづきあいがいやなことだという意味なのであろうか？

そこで、学校でいやなことは何かを尋ねた。

「学校にいるとき何がいやですか？ いくつ選んでもいい。 1.きれいな科目の授業 2.つきあいで友だちと話したり遊んだりすること 3.いじめられること 4.先生のこと 5.クラブ・部活動 6.昼食 7.ホームルーム・学級会 8.運動会などの行事 9.学芸会などの行事 10.いやなことはない 11.その他」(大人は「小中学生時代」のこと)。

このうち「1きれいな授業」「2友だちづきあい」「3いじめられること」「10いやなことはない」の年代比較を示す。

(表7) <学校でいやなこと>

年代別	授業	友だち	いじめ	何もない	総計
70以上	41.3%	3.4%	7.3%	42.3%	494
60代	47.6%	2.0%	7.3%	36.0%	506
50代	59.6%	3.0%	5.9%	24.4%	574
40代	61.0%	3.6%	10.7%	22.7%	2605
30代	59.0%	4.4%	13.9%	20.7%	1876
20代	57.0%	7.5%	12.9%	20.4%	93
高校	78.2%	9.7%	6.6%	8.1%	918
中学	72.4%	8.7%	10.0%	13.1%	688
小学	63.6%	4.6%	20.5%	21.5%	888

「友だちづきあい」と「何もない」の二点を少し詳しく見てみる。

(表8) <楽しいこと非「友人」:いやなことなし>

年代別	何もない	総計
70以上	44.0%	209
60代	30.7%	192
50代	28.1%	178
40代	24.5%	486
30代	22.6%	279
20代	23.1%	13
高校	13.1%	130
中学	13.1%	99
小学	17.2%	128

前表8は、「学校で楽しいこと」として「友だちづきあい」を選ばなかった人（表内の総計数）のうちで「学校でいやなことは何もない」を選んだ人との相関である。

前述のとおり、50代以上の3割から4割強は「楽しいこと」に「友だち……」を選ばなかったが、それが友人関係のまずさが原因なら、学校でいやなことは友人関係になるはずである。

ところが、結果は逆で、その選択率が現少年世代よりも低く、「学校でいやなことは何もない」の選択率が高いのである。

つまり、50代以上は、学校で友人関係に意識がとられるということが相対的に少ない、と見るべきではなからうか。

では、楽しいことが「友だちづきあい」であるのに、いやなことも「友だちづきあい」というケースはあるだろうか？

(表9) <楽しいこと「友人」:いやなこと「友人」>

年代別	友・いや	総計
70以上	3.9%	280
60代	2.6%	309
50代	2.0%	396
40代	2.7%	2114
30代	4.0%	1595
20代	7.5%	80
高校	7.9%	787
中学	7.5%	589
小学	3.8%	759

上表は、「楽しいこと」として「友だち……」を選んだ人（表内総計数）のうち、「いやなこと」としても「友だち……」を選んだ人の割合である。

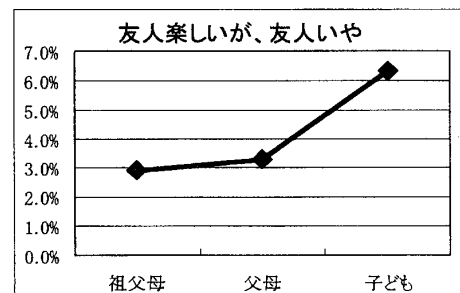
カイ二乗検定では、年代別「友・いや」の個数が特に祖父母世代に少ないので、危険率1%あるいは5%での有意差は出ない。しかし、「祖父母、父母、子ども」という世代別にまとめて処理すると、危険率5%で差が有意となる。それを見たのが、次表10である。

(表10) <同前・世代別>

世代別	友・いや	総計
祖父母	2.9%	646
父母	3.3%	4128
子ども	6.3%	2135

「友だち……」を楽しいと思う人が同時に「友だちづきあい」をいやに感じている、という傾向が現少年世代に突出している。それをグラフにしたのが次図である。

(図6) <同上・世代別>



「友だち……」を楽しいと思う人が同時に「友だちづきあい」をいやに感じている、という傾向が現中高生世代に突出している。これは、何を物語るのか？

「好きなヤツもいれば、嫌いなヤツもいる」というのは当たり前のことだが、それは、「友だちづきあい」が「学校でのいやなこと」という次元とは別の話である。学校に行けば、ある範囲の友だちづきあいは楽しいが、ある範囲（あるいは、同じ範囲か？）の友だちづきあいをいやに感じるというのは、現少年世代が友人関係にかなりナーバスになりがちである、ということ物語るのではないか。

次の問いでもそれを見ることができる。

#### (5) かかわりたくない人はいるか？

「そばに来ないでほしい、とあなたがいつも思う人は誰かいますか？ いくつ選んでもいい。 1.父 2.母 3.祖父 4.祖母 5.兄

弟姉妹の誰か 6.友だちの誰か 7.自分をいじめめる人 8.知っている女の子の誰か 9.親戚のある人 10.近所のある人 11.学校のある先生 12.その他 13.そういう人はいない」(大人は「子どもの頃」)

年代別に処理すると、個数の少ない年代があって有意検定が不能になるので、世代別にまとめた。その結果が次表である(危険率5%で有意)。「1父」「2母」「6友だちの誰か」「7自分をいじめる子」「11ある先生」だけを示しておく。

(表11) <そばに来ないで・世代別>

世代別	父	母	友	いじめ	先生	総計
祖父母	3.4%	0.3%	7.8%	14.2%	5.9%	1050
父母	6.6%	1.4%	9.9%	15.3%	8.8%	4976
子ども	8.1%	3.0%	21.6%	14.8%	18.2%	2477

自分を「いじめる子」は各世代でほぼ同じであるが、「友だちの誰か」が現少年世代に突出的に多い。

次表12は、前の問いにあった「落ち着く人・友だち」「学校では友だちづきあいが楽しい」「学校では友だちづきあいがいや」を選んだそれぞれの人が「友だちの誰かそばに来ないで」を選んだ割合である。

(表12) <「友・そばに来ないで」との関係・世代別>

世代別	友・落ち着く	友・楽しい	友つきあい嫌
祖父母	11.9%	6.8%	3.7%
父母	12.3%	9.8%	24.5%
子ども	21.7%	21.0%	48.4%

## (6) 自立心の脆弱化

表12から何が見えるか?

どの場合も現少年世代の比率が高い。特に「学校でいやなこと・友だちづきあい」と思う人が「友だちの誰かそばに来ないで」と思う、という比率が他世代よりも極端に高い(この場合の「友だち」にはクラスメートも含んでいると思

われるが)。

「そばに来ないで」というのは、「つきあい」への拒否感である。その拒否感を何らかの形で相手に示しうるなら、友人関係が選択的になる。

「この人とはつきあうが、この人とはつきあわない」という関係がある程度は確立される。そうすると、「友だちづきあいがいや」という受け身の心理も生まれにくい。そもそも、「そばに来ないで」という気持ちも働かない。

つまり、自立心(自分は自分だ、という精神性)の問題である。

自立的であればあるほど、まわりは気にならない。子どもが何十何百もいる教室・学校という空間でも、選択的でいられるから、他者との心理的な距離をコントロールしうる。学校の中で友人関係に意識がとられることもない。他者とは適度に距離をおくこともできる。

そういう視野から見ると、現少年世代は自立心が脆弱な状態ではないか、と見えてくる。

「そばに来ないで」と内心では選択的でありながら、その対象が同じであってもなくても、「つきあいがいや」と思いつつも、つきあわざるをえない状況を生んでいる。

したがって、つねに受け身の心理状態に陥る。友人関係の距離感がつかみにくなる。それが、一方では、仲のいい友だちが10人以上もいるという意識に(おそらく)つながっていくのではないか。しかし、そのことよりも、もう一方では、「いやだ」という選択的な拒否感が行動に連動していかないという自立心の脆弱性を物語る。そこに、他世代よりも友人関係にナーバスになる要因が見える。

「自立心の弱さ→受け身の友人関係」という連鎖は、たとえば次でも見られる。

「友だちから電話がかかってきたら（相手が誰かわかる場合）、すぐに出ますか？ 一つだけえらぶ。1.相手が誰でもすぐに出る 2.ある人の場合はときどき出ない 3.ある人の場合は絶対に出ない 4.その他」（大人へは「子どもの頃」）

(表13) <電話に出るか・世代別>

世代別	1	2	3	総計
祖父母	47.0%	4.8%	0.9%	978
父母	88.6%	5.1%	0.8%	5054
子ども	74.8%	18.6%	3.8%	2474

結果は、上表に見るとおりである。

現少年世代は、「ある人の場合はときどき出ない」「絶対に出ない」が他世代よりもかなり多い。「居留守をつかう」ということが拒否行動であるとする、「ナーバス」という批評よりも、「深刻な状況」と見るべきであろう。

### (6) 友だちの視線が気になるか？

「何かをするとき、友だちにどう思われるか、ということが気になりますか？ 一つだけ選ぶ。

1.たいてい気になる 2.気になるほうが多い  
3.半々くらい 4.気になるほうが少ない 5.気にならない 6.その他」（大人へは「子どもの頃」）

「1+2」を「気になるほう」、「4+5」を「気にならないほう」として示す。

(表14) <友だちの視線>

年代別	気になるほう	半々	ならないほう	総計
70以上	17.1%	18.0%	64.5%	490
60代	20.3%	21.5%	57.5%	508
50代	22.2%	27.1%	49.7%	572
40代	28.5%	33.0%	38.2%	2612
30代	39.0%	33.2%	27.7%	1882
20代	35.5%	33.3%	31.2%	93
高校	49.9%	31.3%	18.3%	922
中学	43.1%	36.1%	20.8%	687
小学	37.2%	33.8%	28.6%	887

30代から下が「気になるほう」が「気にならないほう」を抜く。しかし、ここでも現少年世

代には、友だちの視線がかなり気になる傾向が見て取れる。

自分は自分だ、という自立心が育っていなければ、まわりの目にも受け身になる。だから、それが気になる。

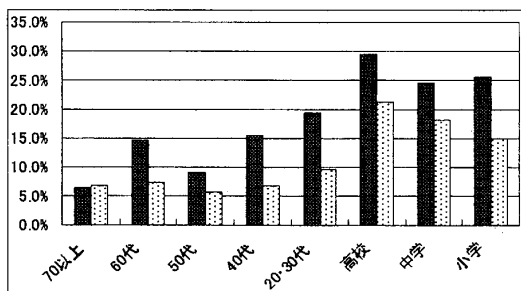
現少年世代ほどに友人関係に神経をつかう世代は、過去にはなかったのではないか。少なくとも過去二世帯よりも強まっている、といえる。

次図は、「友だちの視線」が「気になるほう」（表14）について、「学校でいやなこと」の一つに「いじめられること」を選んだ人と選ばなかった人を比較したものである（20代は「いじめ選択」の個数が少ないので、30代とグループ化した）。

(表15) <いやなことで「いじめ」を選択した・しなかった人のうち、「友だちの視線が気になるほう」（表14と同じ処理）と答えた人の比率>

年代別	いやなこと	気になる	総計
70以上	いじめ選択	16.1%	31
	選択なし	17.3%	440
60代	いじめ選択	23.5%	34
	選択なし	20.0%	461
50代	いじめ選択	42.4%	33
	選択なし	20.9%	536
40代	いじめ選択	44.8%	277
	選択なし	26.5%	2317
20・30代	いじめ選択	56.3%	272
	選択なし	35.9%	1688
高校	いじめ選択	65.6%	61
	選択なし	49.1%	855
中学	いじめ選択	49.3%	69
	選択なし	42.3%	615
小学	いじめ選択	49.4%	180
	選択なし	34.0%	701

(図7) <同上：黒っぽいほうが「いじめ選択」>



「70以上」を除くと、いつの時代も、いじめ



られている子のほうが、そうではない子よりも「友だちにどう思われるかを気にする」度合いが強い。特に、現少年世代の場合、いじめられている子が「友だちを気にする」比率が他世代よりも高くなっている。

### (7) 学校は楽しいか？

現少年たちが学校をどう感じているのかは、予想がつく。

「ふだん（病気や悪天候などの特別の日以外）『学校に行きたくない』とよく思いますか？ 一つだけ選ぶ。1.よく思う 2.ときどき思う 3.一二度は思った 4.思ったことはない 5.その他」(大人へは「子どもの頃」)

まず、世代別に示す。

(表16) <学校に行きたくないと思う・世代別>

世代別	よく	ときどき	一二度	ない	総計
祖父母	4.4%	16.2%	17.4%	61.0%	1103
父母	6.1%	25.3%	32.3%	35.8%	5066
子ども	17.1%	34.2%	30.6%	17.5%	2489

「よく思う」人は、子ども（現少年世代）で突出する。「ときどき」を加えると50%を超える子どもが学校に行きたくないと思うことがある、ということだ。

年代別を示しておく。20代から急増する。

(表17) <同上・年代別>

年代別	よく	ときどき	一二度	ない	総計
70以上	3.0%	16.4%	12.7%	67.3%	505
60代	5.2%	15.3%	19.9%	57.8%	517
50代	4.9%	21.3%	28.0%	45.3%	572
40代	5.1%	24.2%	33.0%	37.2%	2603
30代	7.3%	27.7%	32.9%	31.7%	1878
20代	16.0%	29.8%	26.6%	26.6%	94
高校	21.9%	39.6%	26.3%	11.6%	915
中学	16.9%	32.6%	32.6%	17.4%	691
小学	12.2%	30.0%	33.5%	23.7%	883

この傾向は学校の成績と相関するか？ 「学校の勉強は(科目にもよるが、全体としては)できるほうだ、と思いますか？ 一つだけ選ぶ。 1.

できるほう 2.ややできるほう 3.中くらい 4.ややできないほう 5.できないほう 6.その他」(大人へは「小中学生時代」という問いの結果との相関をしてみる。

(表18) <成績と学校行きたくないの相関>

世代別	勉強	学校に行きたくないと思う			
		よく	ときどき	一二度	ない
祖父母	できるほう	1.9%	9.2%	15.2%	73.6%
	中くらい	2.7%	17.3%	20.8%	57.7%
	できないほう	13.3%	26.0%	12.2%	48.0%
父母	できるほう	3.4%	21.0%	33.1%	42.2%
	中くらい	5.0%	24.3%	35.0%	34.9%
	できないほう	11.9%	34.1%	26.3%	27.5%
子ども	できるほう	12.3%	29.5%	34.8%	23.1%
	中くらい	14.5%	35.0%	31.4%	18.4%
	できないほう	25.1%	37.4%	25.8%	10.9%

勉強ができるほうであるなら学校逃避感は弱いと思われるが、現少年世代では「できるほう」と思っている人でも「学校に行きたくないと思う」割合が以前の世代よりもかなり多い。

次の表は、勉強が「できるほう」の人で「学校では友だちづきあいがいや」と思う人のうち「学校に行きたくない」とおもう割合を示したものである(祖父母は個数が少ないので割愛。危険率5%で検定済み)。

(表19) <勉強、友だちづきあい、学校行きたくない、の相関・世代別>

勉強	学校では「友だちづきあいがいや」のうち				
	学校に行きたくないと思う				
できるほう	よく	ときどき	一二度	ない	総計
父母	5.5%	27.5%	33.0%	34.1%	91
子ども	27.0%	41.3%	22.2%	9.5%	63

勉強が「できるほう」で「学校に行きたくないと思う」子どもは表16では12.3%であったが、「友だちづきあいがいや」にかぎって見ると27.0%に増える。

### 3. 学校教育の課題

友人関係がいまの子どもに重圧となつてのしかかっている。どう解決するか？ 家庭や学校

教師の力で解決できるか？

「自分で解決できない悩みがあった場合、だれに相談するか（したか）」を尋ねた。父、母、祖母、祖父、兄弟姉妹、親戚の人、友だちの誰か、学校のある先生、誰にも相談しない、などの選択肢を用意した（複数回答）。

そのうち、「父」「母」「先生」を選択した世代別の比率は次表のとおりである。

（表18）＜悩みは誰に相談する？＞

世代別	父	母	先生
祖父母	15.62%	55.00%	6.27%
父母	9.06%	42.18%	4.28%
子ども	12.05%	40.48%	7.23%

どの世代でも、少年期の子どもは、悩みがあれば親に相談しているのだ。教師に相談するケースはどの世代でも少ないが、その比率に世代間で目立った差があるわけではない。

つまり、（悩みの内容別に調査はしていないが）まわりのおとなはいつの時代でもほぼ同程度に子どもの悩みに答えている、ということになる。

したがって、友人関係の重苦しさは、「相談」で解決できる性質ではなさそうである。

根本的な問題は、自立心が脆弱化しているところにある。これにおとなはどう対処するか。

### 3. 学校教育の課題

「自分は自分だ」という意識が弱いとは、どういうことか？

「他と異なることへの恐れ」である。その恐れが強くなれば、必然的に「友だちにどう思われるか」は気になる。気になるから、さらに恐れる。気になるから、だれかの何かに「差異」を見いだしたくなる。そして、排除したくなる（いじめである）。

だから、その「恐れ」自体を消す方向でおとなは子どもに働きかける必要がある。

ところが、現在の学校教育は、その逆で、「他

と異なることへの恐れ」をさらに増殖する。どんなことでも「みんなが同じであること」の方向に進もうとする。「一律化」であり、「規律の強化」である。

学校経営にとっては、始業時刻、カリキュラムなど、一律になる面はありうる。

しかし、50代以上の人の少年時代にも、それはあった。なかったのは（あるいは、弱かったのは）、いわゆる「校則」をはじめとした学校生活の全面に及ぶ一律化・規律化である。だから、教科学習以外では、学校で「自分は自分だ」でいられた。「他と異なること」に自由でいられた。親も地域社会も、子ども相互の差異を当たり前のこととして認知していた。

ところが、教育再生会議はいう。

「……近年、子供の規範意識は低下し、国際的に見ても、我が国の子供は自尊心が乏しいと言われております」、「学校で、集団生活やスポーツを通じて、子供たちに社会の決まりや規範意識を学ばせるべきです」（教育再生会議第一次報告「社会総がかりで教育再生を」平成19年1月24日）

逆である。学校で「決まりを学ばせる」ということに教師の目が向いていなかった世代のほうが子どもに「自尊心」（自立心：自分は自分だ）があったのではないか。また、日本の学校のような一律化とは逆の方向にある諸外国の学校が子どもの自立心をどう保証しているか、ということに学ぶべきではないか。

本稿は、長田「少年の世界…その世代間比較調査…」（2002、2003年度愛知大学研究助成による）に関する1. および2. を長田が担当し、3. を含む全編を遠藤の指導によって成り立たせたものである。